

佐賀大学美術館

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

平成25年度

年報 + 紀要
2013

佐賀大学美術館「年報／紀要」の創刊にあたって

佐賀大学美術館は、平成25年10月2日、全国でも例のない国立総合大学附設美術館として開館しました。このたび、開館以降の活動をご報告する「年報」と、美術館にかかわる研究・制作等を紹介する「紀要」を合冊にてお届けいたします。

本年度は、10月の開館から半年間ということで、展示事業としては一連の「開館記念特別展」が中心でした。しかし、その間にも、各学部・学科による卒業・修了制作展など学生が運営する展示や、学内プロジェクトの紹介企画などを開催できました。また、調査・研修という形で県内外から訪問を受け、地元紙等でもたびたび取り上げられるなど、新設の佐賀大学美術館に対し多くの方々に関心を向けて下さったこと、こうして記録として見た時に改めて実感いたします。

美術館をとりまく活動、研究、制作等の状況を、記録から一歩進めた形で紹介するのが、後半の紀要部分となります。日々、ルーティンワークの積み重ねと、個々の事業を無事に運営することに意識がとられがちですが、事業内容の深化、他館との連携などの将来構想、学内外での館の立ち位置の確認等のために、振り返りと検証は欠かせません。今回は、第1号ということで、開館記念展を舞台に展示された佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室の現役教員たちの仕事を、本館副館長の目から紹介いたします。

文化施設では、開館直後はハードが、それ以降はソフト、すなわち運営面が評価の対象となります。そのことを忘れずに、また、美術館の設立と運営のためにご寄附をいただいた多くの皆さまから身近に感じていただける施設を目指して、次年度以降もつとめていく所存です。

今後とも、本学美術館へのご指導とご支援をお願いいたします。

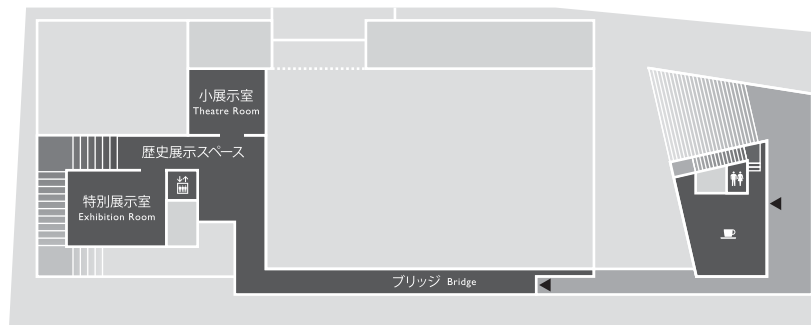
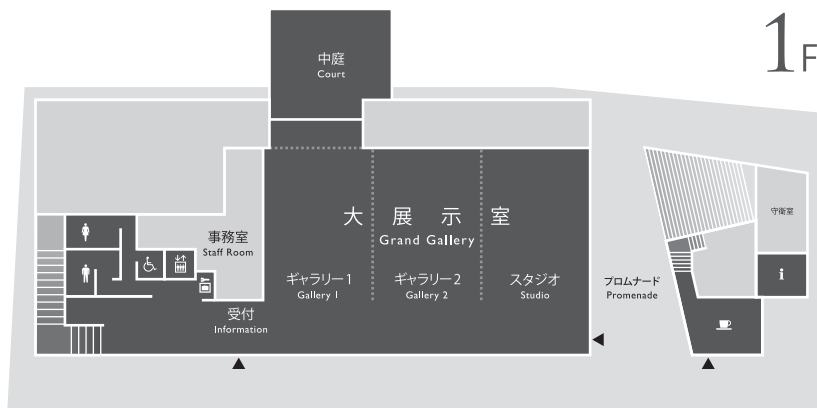
平成26年3月

佐賀大学美術館
館長 瀬口 昌洋



〔館概要〕

名 称	佐賀大学美術館
所 在 地	佐賀市本庄町1番地
基本設計	佐賀大学
実施設計	(株)梓設計九州支社 (協力: (株)ワークヴィジョンズ)
監 理	佐賀大学環境施設部
施 工	(建築) 金子建設(株) (電気) (株)佐電工 (機械) (株)九電工
構 造	鉄骨造・地上2階建
延床面積	1,737㎡
展示面積	599㎡ ギャラリー1 104㎡ ギャラリー2 104㎡ スタジオ 111㎡ 特別展示室 48㎡ 小展示室 34㎡ 歴史展示スペース 55㎡
そ の 他	プロムナード 中庭 ブリッジ
設 備	トイレ 多目的トイレ ロッカー
併 設	カフェ



〔沿革〕

平成22年 6 月	学長特命 WG (通称 4 人会) を設置し、検討を開始
平成23年 1 月 4 日	学長年頭挨拶で美術館設置計画を披露
平成23年 3 月 9 日	佐賀大学役員会で「美術館設置諮問委員会」設置報告
平成23年 6 月 8 日	佐賀大学役員会にて美術館設置諮問委員会からの答申書を報告。 美術館の設置を審議・了承。同時に 3 WG (設置募金、利用、建設) の設置についても報告
平成23年12月20日	美術館基本設計建設コンサルタント選定委員会で基本設計コンサルタント選定
平成24年 2 月22日	佐賀大学役員会にて基本設計のイメージを説明、募金趣意書を審議・了承
平成24年 5 月14日	基本設計納入
平成24年12月29日	美術館実施設計終了
平成25年 1 月22日	美術館施設整備事業競争参加資格等審査委員会で美術館施工業者決定
平成25年 2 月14日	新営工事起工式
平成25年 6 月26日	美術館規則、美術館運営委員会規程制定
平成25年 8 月30日	美術館建設工事竣工
平成25年 9 月10日	ネーミングライツ・パートナー募集開始
平成25年 9 月28日	佐賀大学統合10周年記念式典・佐賀大学美術館開館記念式典
平成25年10月 2 日	一般公開開始
平成25年10月28日	佐賀大学美術館利用規定制定

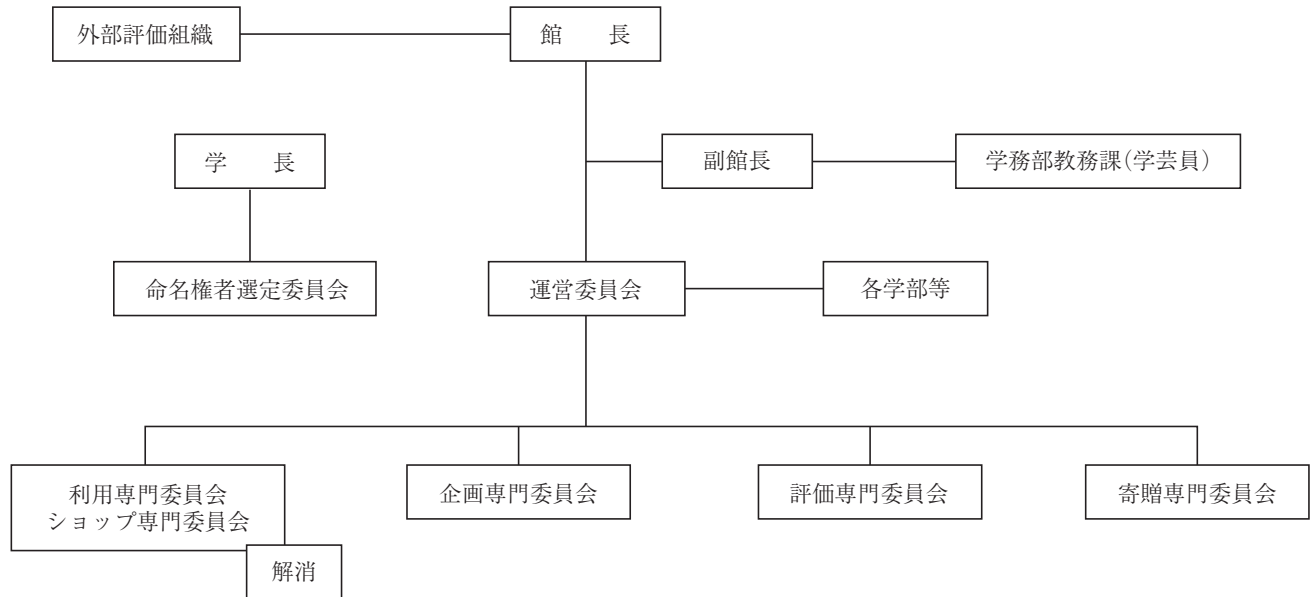
〔設立主旨〕

2013年10月、旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年記念事業として佐賀大学美術館は誕生しました。美術館と、併せて整備された正門エリアは、「地域に開かれた大学」という佐賀大学の理念を象徴するものです。美術館は、総合大学である佐賀大学の魅力を多方面に向けて、より多くの人に知っていただくための情報発信源として活用されています。

〔活動目的〕

佐賀大学が所有する資料の公開や、特別教科(美術・工芸)教員養成課程に関連する美術作品を収集・保管・展示するとともに、美術の新しい活動や表現を地域の方々とともに作り上げ、総合大学が生み出すさまざまな研究成果を周知・公開していきます。

〔組織図〕



〔職員〕

館長	瀬口昌洋
副館長	吉住磨子
事務員(学芸員)	佐々木奈美子
事務員	宮川洋
事務員	西村彰
事務補佐員	伊東真由美
事務補佐員(学芸員)	上田香苗
事務補佐員(学芸員)	渡邊恵
事務補佐員(学芸員)	大塚麻理子
事務補佐員	黒瀬由紀子

平成26年3月31日現在

〔運営委員会委員〕

委員長(館長)	理事	瀬口昌洋
副委員長(副館長)	教授	吉住磨子
委員	准教授	重藤輝行
委員	教授	中村博和
委員	准教授	永松美雪
委員	教授	石橋孝治(～平成25年9月)
委員	准教授	後藤隆太郎(平成25年10月～)
委員	教授	有馬進
委員	学務部長	安倍武司
委員	佐賀大学同窓会長	宮島豊秀
委員	教授	田中嘉生
委員	教授	田中右紀

平成26年3月31日現在

目次

[年報]

3 ——— 館概要

4 ——— 沿革

5 ——— 組織図

7 ——— 平成25年度の活動

1. 展示記録

2. イベント記録

3. 実習・研修

4. 刊行・掲載・見学

5. 寄附・その他

6. 入館者一覧表

[紀要]

26 ——— 佐賀大学美術館から発信する伝統と革新
——開館記念特別展「今を創る指導者たち」に寄せて——
吉住磨子（佐賀大学美術館副館長）

31 ——— 年表

32 ——— カタログ

〔平成25年度の活動〕

- 2013年9月28日 開館記念式典
- 10月1日 内覧会
- 10月2日 一般公開
- 10月2日 開館記念特別展
- 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(前期)―『特美』の育成者たち」(～11.17)
- 企画Ⅱ「だんだんまるまる ようこそだんごむしワールドへ」(～11.17)
- 企画Ⅲ「佐賀大学のルーツをさぐる 佐賀師範・旧制佐高の時代」(～2.9)
- 10月23日 佐賀大学美術館開館記念講演会
- 講師：名和晃平氏「名和晃平の創作と現場 クリエイティブ・プラットフォーム“SANDWICH”のチームワーク」
- 11月12日 入館者1万人達成
- 11月22日 「美術・工芸課程 第55回総合展」(～12.5)
- 12月7日 「第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト」(～12.8)
- 12月13日 開館記念特別展
- 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(後期)―今を創る指導者たちⅠ」(～2014.1.13)
- 12月19日 「第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト」追加展示(～2014.1.13)
- 2014年1月11日 アートツアー in 佐賀大学美術館
- 1月21日 開館記念特別展
- 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(後期)―今を創る指導者たちⅡ」(～2.9)
- 1月26日 アートツアー in 佐賀大学美術館
- 1月29日 平成25年度佐賀大学学長招待講演会 佐賀大学美術館開館記念特別講演
- 講師：宮田亮平氏「夢を探そう」
- 2月21日 「美術・工芸教室 第58回卒業制作展 第20回修了制作展」(～3.2)
- 3月7日 「デジタル表現技術者養成プログラム 電腦芸術展 第4期生 修了作品展」(～3.14)
- 3月7日 「都市工学専攻・理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展」(～3.14)
- 3月9日 「第15回 書道専攻卒業制作展」(～3.14)
- 3月20日 「特美の創始者 石本秀雄のアトリエ展」(～5.6)

1. 展示記録

開館記念特別展 企画 I (前期)「美術・工芸教室60年の軌跡—『特美』の育成者たち」

《展覧会趣旨》

佐賀大学美術館の開館記念展として、大学の歴史とともに歩んできた特別教科(美術・工芸)教員養成課程-通称「特美」-を紹介する「美術・工芸教室60年の軌跡」を開催した。昭和28年の開設以来、優れた人材を輩出してきた「特美」の伝統こそが、このたびの佐賀大学美術館設立の大きな原動力となったことは言うまでもなく、本学で教授・助教授・講師を勤めた教員の作品を一堂に集めることで、美術・工芸講座をもつ総合大学である国立大学法人・佐賀大学のユニークな一面を展観した。

前期は「『特美』の育成者たち」と題し、草創期からほぼ半世紀にわたって活躍した、かつての教員たちにスポットをあて、現在の文化教育学部美術・工芸課程へと受け継がれる精神の源流を辿った。

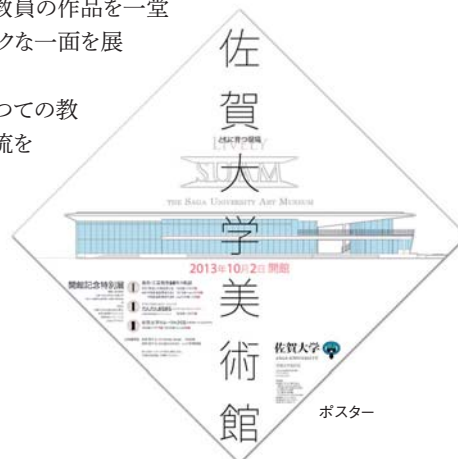
《会期》2013年10月2日(水)～11月17日(日) [40日間]

《会場》佐賀大学美術館 ギャラリー1、2、特別展示室、小展示室

《主催》佐賀大学美術館

《展示内容》作家23名 全出品点数43点+参考資料1点

《展示図録》AB判 80ページ 全出品作を掲載



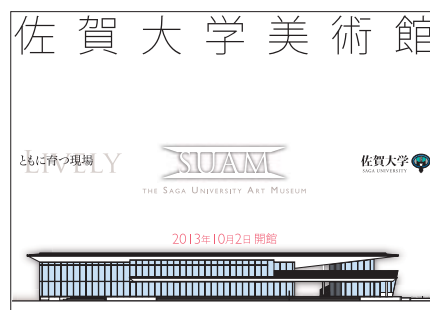
ポスター



ギャラリー1



ギャラリー2



チラシ



小展示室

作品リスト (『特美』の育成者たち)

作家名	作品名	制作年
藤田隆治	地脈の魚	1961
藤田隆治	魚壁	1963
下川千秋	西芳寺林泉	1964
下川千秋	蒼苑	1972
岩永京吉	暖冬	1972
岩永京吉	漁師	1982
牛塚和男	太基	1985
牛塚和男	粹 I	1994
石本秀雄	チェロを弾く男	1962
石本秀雄	トレド	1966
筒井茂雄	嬉野風景	1971
久富邦夫	合唱	1961
久富邦夫	りんご	1965
深川善次	秋日	1994
深川善次	天平の面影	2010
深草廣平	入江の教会	1980
深草廣平	婦人座像	1989
上瀧泰嗣	アトリエの景-鳥-	1985
上瀧泰嗣	不安の連鎖	2009
緒方敏雄	きこえる	1977
緒方敏雄	夏日断章	1981
山本民二	無題	1979
山本民二	アトリエの午後	1976
成富 宏	空	1995
成富 宏	雷	2005
佐口七朗	構成 2	1985
佐口七朗	球体による構成-589	1986
宮木英幸	「CLEAN ENERGY」ポスター	1980
宮木英幸	Yura~Yura~Yura 2010	2010
瀧 一夫	格子文瓶	1958
宮尾正隆	風-吉野ヶ里	1998
宮尾正隆	ろくろと線遊び II	2000
豊田勝秋	廣間への花挿	1932
豊田勝秋	玉縁のある円い壺	1971
豊田勝秋	資料「玉縁のある円い壺」図面	1971
中牟田佳彰	縄目鑄銅花器	1965
中牟田佳彰	鑄銅水盤	1983
田中一幸	秘密の箱「束」	1981
田中一幸	遺構櫓	2010
太田朋宏	騎行	2010
城 秀男	現代想	1969
城 秀男	回昔壮姿	1986
小川泰彦	有明	1979
小川泰彦	帰る日近く	1986

開館記念特別展 企画Ⅰ（後期）「美術・工芸教室60年の軌跡—今を創る指導者たちⅠ・Ⅱ」

《展覧会趣旨》

開館記念展「美術・工芸教室60年の軌跡」の後期は「今を創る指導者たち」というタイトルのもと、今現在、佐賀大学で教鞭をとる教員の作品を紹介した。会期をさらに2つに分け、前半は絵画と彫刻、後半は工芸とデザインを中心に、作者自身が出品作品を選択し、インスタレーションを含む展示を行った。この時、この場でしかできない空間を作りあげ、学生たちに範を示した。

《会期》Ⅰ 2013年12月13日（金）～2014年1月13日（月・祝）（18日間）

Ⅱ 2014年1月21日（火）～2月9日（日）（18日間）

《会場》Ⅰ 佐賀大学美術館 ギャラリー1、2、スタジオ

Ⅱ 佐賀大学美術館全館（特別展示室を除く）

《主催》佐賀大学美術館

《展示内容》Ⅰ 作家3名 全出品点数32点

美術理論・美術教育 2名 略歴と業績をパネル展示（Ⅱまで継続）

Ⅱ 作家4名 全出品点数66点



石崎誠和



小木曾誠



徳安和博



荒木博申



田中右紀



田中嘉生



井川健

作品リスト（今を創る指導者たちⅠ）

作家名	作品名	制作年
石崎誠和	クラウン	2011～
(日本画)	ひな段の形をした時間	2011
	誰かと誰かの髪	
	wear k. h 1962	2013
	wear k. h 1966	2013
	wear reverse 2006	2006
	wear h. i 2007	2013
	wear reverse 2013	2013
	wear h. i 2011	2012
	wear stars	2012
	服を脱ぐ	2008
	ミントグリーンのバックをする人	2010
小木曾誠	蓮連たる桂	2006
(西洋画)	静徹なものたち	2006
	蓮連たる楠	2007
	蓮連たる楠	2007
	流れ	2009
	柔脆な共存	2010
	静徹なものたち	2010
	静徹なものたち	2012
	フィレンツェ	2013
	桜の光の中に	2013
	地の音	2013
	ブラハ	2013
徳安和博	ジーンズの女	1998
(彫塑)	飛び立つ日を夢見る女	2002
	Shin	2002
	三島の彼らに会った日	2003
	初心	2003
	束	2011
	大きめの服を着る女	2011
	手の内にあるもの	2012
	出番を待つ小さな選手	2012

作品リスト（今を創る指導者たちⅡ）

作家名	作品名	制作年
田中右紀	Heart	2010
(窯芸)	Pregnancy	2009
	Metamorphose“V”	2006
	漏斗	2009
	カプセル	2013
	食べ物の思い出	
	家族の思い出	
	仕事の思い出	
	社会の思い出	
	Orbit	2003
	Metamorphose“X・X”	2005
	馬	2002
	羊	2003
	菌環 (Fairy ring)	2012
	十二支	2001～2011
	馬俑	2014

作家名	作品名	制作年
田中嘉生	ある日	2006
(染色)	ある日の線 - コソデー	2005
	秋行く	2010
	夏待つ	2010
	春待つ	2012
	冬来る	2012
	ある日の鳥	2002
	ある日の風	2005
	積	1985
	冬行く	2008
	ある日の空	1994
井川 健	波の華	2013
(木工工芸)	時の航行V	2014
	Line and Surface	2010
	時の空	2014
	空夜	2014
	風の間	2011
	月の間	2011
	波影	2014
荒木博申	〈ブックデザイン〉	
(デザイン)	佐賀偉人伝	2010～
	兵庫教育大学20年史	1998
	美術・工芸教室50年史	2003
	美のからくり	2011
	佐賀大学美術館開館記念展 図録	2013
	我孫子市鳥の博物館公式ガイドブック	1991
	霞月楼百年	1988
	マルゲリータ女王のピッツァ	1997
	ベタフロップスコンピュータ	1997
	〈ポスター〉	
	佐賀大学美術館開館記念展	2013
	筑波サーキット	1990
	フォーゲラー&リルケ展	1990
	大学説明会 2004	2004
	文明のふるさと 1	1992
	文明のふるさと 2	1994
	美のからくり	2011
	佐賀偉人伝	2012
	倉成英俊講演会	2012
	柳幸典講演会	2013
	名和晃平講演会	2013
	〈ダイアグラム〉	
	オリンピックグラフィックス	2007
	サガン鳥栖 2011	2011
	サガン鳥栖 2012	2012
	サガン鳥栖 2013	2013
	〈サイン計画〉	
	兵庫教育大学総合案内	1998
	関西学院大学図書館サインバナー	1997
	佐賀大学 学章ほか	2004
	佐賀大学 正門整備計画	2013
	佐賀大学美術館 ログタイプほか	2012
	記者会見バックパネル	2012
	時計台	2012
	〈マップ〉	
	アリスの地球儀	1994

開館記念特別展 企画Ⅱ「だんだんまるまる ようこそ！だんごむしワールドへ！」

(佐賀市民芸術祭パートナーイベント)

《展覧会趣旨》

テーマとして選んだ「ダンゴムシ」を、時に2次元(絵画)、時に3次元(立体物)で表現する造形活動により、協働制作の喜びを共有しようとするワークショップ。佐賀大学附属学校園の生徒や園児、そして、本学の学生・教員が一団となって、美術館1階スタジオを舞台に一つの巨大な空間を作り上げた。会場ではダンゴムシの誕生から、作品が増殖していく様子を、会期を通して来館者も目撃することになった。

《会期》2013年10月2日(水)～11月17日(日)[41日間]

《会場》佐賀大学美術館 スタジオ

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室 佐賀大学美術館

《協力》附属幼稚園・もも組・さくら組・まつ組、附属小学校3年2組

《後援》社会貢献プロジェクト「来てみんしゃい！佐賀大学へ」

《内容》段ボールを使った子どもと市民のためのプレイングスペースの公開制作ワークショップ

《関連行事》・よみきかせ会(協力)子どもの本屋ピピン、附属小読み聞かせ隊

11月9日(土) 11時～、13時～、15時～3回実施。各回30分

・だんごむしパレード(協力)附属小学校金管バンド、附属中学校吹奏楽部、佐賀大学吹奏楽部

11月17日(日) 10時～12時

佐賀大学美術館前から佐賀城本丸歴史館(往復)をパレード。参加者は一般参加を含む60名



チラシ



展示風景



ワークショップ



パレード

開館記念特別展 企画Ⅲ「佐賀大学のルーツをさぐる 佐賀師範・旧制佐高の時代」

《展覧会趣旨》

昭和24年5月31日、国立学校設置法（昭和24年法律第150号）の公布により、旧制佐賀高等学校、佐賀師範学校、佐賀青年師範学校が一つになり発足した佐賀大学。文理学部と教育学部の2学部からスタートして60余年。10年前には医科大学も統合し、現在では5学部を擁する総合大学として新たな歴史を重ねている。

今回は美術館の開館記念展の一環として、佐賀大学の歴史を、旧制佐高や師範学校、そして現在大学の写真やパネルを用いて紹介した。

《会期》2013年10月2日（水）～11月17日（日）

・12月13日（金）～2014年2月9日（日）〔77日間〕

《会場》佐賀大学美術館 歴史展示スペース

《主催》佐賀大学美術館 地域学歴史文化研究センター

《資料提供・協力》臼杵市教育委員会 佐賀大学同窓会

《展示内容》佐賀大学の歴史をパネル7枚で展示



展示風景

2. イベント記録

「佐賀大学統合10周年記念式典/佐賀大学美術館開館式典」

佐賀大学統合10周年を記念し、また、新しくなった正門の披露と10周年の記念事業として建設した美術館の開館式典を開催。

《日時》2013年9月28日（土） 13時30分～

《参加者》招待者229名



除幕式



テープカット

「開館記念特別展 内覧会」

開館記念特別展の開催にあたり、作家、ご遺族、作品所蔵者等関係者を招いた内覧会を開催。

《日時》2013年10月1日（火） 10時～11時

《参加者》招待者約50名



「佐賀大学美術館開館記念講演会」

《日時》2013年10月23日（水） 14時40分～16時10分

《会場》佐賀大学 教養教育大講義室



名和晃平氏

《講師》名和晃平氏（彫刻家・京都造形芸術大学准教授）

《演題》「名和晃平の創作と現場」

クリエイティブ・プラットフォーム“SANDWICH”のチームワーク」

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室 佐賀大学美術館

《参加者》聴講者180名（一般参加者含む）



「アートツアー in 佐賀大学美術館～ようこそ美術・工芸の世界へ～」

「美術・工芸教室60年の軌跡～今を創る指導者たちⅠ・Ⅱ」の鑑賞ツアーを開催。作品解説は佐賀大学生が担当した。

《日時》2014年1月11日（土）、1月26日（日）

両日とも1日2回開催。13時～14時 / 15時～16時

《主催》佐賀大学美術・工芸教室 《協力》佐賀大学美術館

《後援》社会貢献プロジェクト「来てみんしゃい！佐賀大学へ」

《参加者》一般参加者43名



ワークシート



「佐賀大学美術館開館記念講演会/平成25年度佐賀大学学長招待講演会」

《日時》2014年1月29日(水) 14時40分～16時30分

《会場》佐賀大学 教養教育大講義室

《講師》宮田亮平氏(東京藝術大学学長・金工作家)

《演題》「夢を探そう」

《主催》佐賀大学総務部総務課 佐賀大学美術館

《参加者》聴講者250名(一般参加者含む)



宮田亮平氏



3. 実習・研修

〔監視員実習〕

《期間》2013年10月2日（水）～11月17日（日）

《参加者》58名

《実習内容》学芸員資格取得者及び希望者による監視員実習。開館記念特別展 企画Ⅰ（前期）「美術・工芸教室60年の軌跡—『特美』の育成者たち」の展覧会において、1人7時間相当の監視実習を行った。参加者は1年から4年まで幅広く、監視の際に気づいたことや質問などを簡単なレポートとして提出、美術館職員がコメントを返す形で質問に答えた。

〔学芸員技術研修会〕

大学博物館・美術館を活用したアートマネジメント人材育成事業（文化庁平成25年度助成 事務局：九州産業大学）による、学芸員等博物館関係者を対象とした研修会が各館で開催されており、そのうちの展示制作、博物館科学、デジタルアーカイブスの研修会が当館を会場にして行われた。

〈展示制作〉

《日時》2014年2月13日（木） 13時～17時

《講師》洪恒夫（東京大学総合研究博物館特任教授）

《内容》展示プロデューサーでありデザイナー、プランナーでもある洪恒夫先生の指導の下、「展示とは？」という概念的な部分から実際の展示レイアウトなど、展示制作にまつわる様々なポイントをグループワークも交えながら学び、大変有意義な研修会となった。



〈博物館科学〉

《日時》2014年3月5日（水） 13時～15時

《講師》佐野千絵（東京文化財研究所保存修復科学センター保存科学研究室長）

《内容》「博物館アーカイブスの資料保存と資料管理」という演題で、資料保存の考え方から、材質ごとの具体的な損傷例、対策などをお話いただいた。



〈デジタルアーカイブス〉

《日時》2014年3月5日（水） 15時30分～17時

《講師》内田剛史（早稲田システム開発株式会社代表取締役）

《内容》「ミュージアムITの最新事情と発展の方向性」という演題で、博物館のデジタルアーカイブスの現状、課題解決法、そしてミュージアムITの未来についてお話いただいた。



4. 刊行・掲載・見学

〔刊行物〕

「佐賀大学美術館開館記念特別展

美術・工芸教室60年の軌跡Ⅰ—『特美』の育成者たち

《概要》西野嘉章「ユニヴァーシティ・ミュージアムの使命について」

佐々木奈美子「ともに育つ現場へ 佐賀大学美術館の船出」

歴代教員年表

カタログ

前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷

—『特美』の設置から今日まで—

出品リスト

《仕様》AB判 80ページ 4色刷

《発行部数》2000部

《発行日》2013年10月1日



アートマップ「THE SAGA UNIVERSITY × ART」

《概要》佐賀大学内の作品を紹介。

《仕様》630mm×296mm 変則三折 多色刷

《発行部数》2000部

《発行日》2013年12月25日

《編集》佐賀大学美術館 《発行》美術・工芸教室

《後援》社会貢献プロジェクト「来てみんしゃい！佐賀大学へ」



「佐賀大学美術館 年報/紀要」

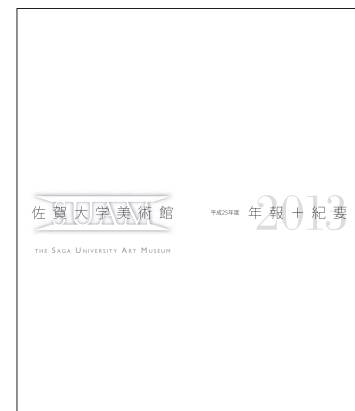
《概要》年報

紀要

《仕様》AB判 62ページ 4色刷

《発行部数》800部

《発行日》2014年3月31日



〔掲載紙・テレビ〕

- ・佐賀大学美術館が完成（8月30日 STS、31日 佐賀新聞、9月1日 読売新聞、2日 NHK）
- ・統合10周年記念事業「佐賀大学美術館」が完成（9月3日 佐賀建設新聞）
- ・佐賀大学美術館完成（9月4日 朝日・毎日新聞）
- ・佐賀大学コンテンツデザインコンテスト（9月10日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館完成（9月14日 西日本新聞）
- ・オープン目前佐賀大学美術館、中継で案内
かちかちワイド 16時50分～ スーパーニュース17時54分～
（9月26日 STS）
- ・佐賀大学・佐賀医科大学統合10周年、美術館開館（9月28日 STS、29日 佐賀・西日本・読売・朝日・毎日新聞）
- ・「佐賀大学美術館」オープン（10月2日 NHK ニュース）
- ・佐賀大学美術館紹介。NHK 佐賀放送局「ひるまえ情報便」11時45分～（10月4日 NHK 佐賀放送局）
- ・「佐賀大学美術館」オープン（10月2日 STS、3日 読売・毎日新聞）
- ・佐賀大学美術館が開館記念展（10月8日 佐賀新聞）
- ・デスクノート（10月19日 佐賀新聞）
- ・ダンボールで工作（11月5日 佐賀新聞）
- ・市民の憩いの美術館（11月4日 日本経済新聞）
- ・佐賀大学美術館が命名権募集（11月7日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館1万人突破（11月12日 STS ニュース）
- ・佐賀大学美術館来館1万人（11月14日 佐賀・朝日新聞）
- ・佐賀大学美術館（11月14日 読売新聞）
- ・ダンゴムシパレード（11月18日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館命名権（11月16日 西日本新聞）
- ・美術・工芸課程「総合展」（11月21日 朝日新聞）
- ・佐賀大学美術館で「総合展」（11月26日 佐賀新聞）
- ・佐大生の力作69点（11月28日 読売新聞）
- ・ニュースこの人（12月1日 佐賀新聞）
- ・美術館で総合展（12月3日 朝日新聞）
- ・佐賀大学美術館命名権料半額に（12月4日 佐賀・西日本・朝日・日本経済新聞）
- ・佐賀大学コンテンツデザインコンテスト（12月5日 朝日新聞）
- ・佐賀大学美術館命名権を再募集（12月4日 NHK ニュース）
- ・コンテンツデザインコンテスト（12月6日 佐賀・西日本新聞）
- ・美術館オープン2ヶ月（12月8日 佐賀新聞）
- ・コンテンツデザインコンテスト（12月8日 朝日新聞）
- ・読者の声 ひろば（12月11日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館開館記念特別展（12月17日 佐賀新聞）
- ・第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト（12月17日 佐賀新聞）
- ・県内文化回顧2013「美術・工芸」（12月24日 佐賀新聞）
- ・県内文化回顧（12月26日 佐賀新聞）
- ・文化（12月30日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館命名権（1月9日 読売新聞）
- ・「アートツアー in 佐賀大学美術館」参加者募集（1月9日 佐賀・読売新聞）
- ・展示室無料貸し出し（1月14日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学美術館でアートツアー（1月12日 佐賀新聞）
- ・アートツアー in 佐賀大学美術館（1月16日 毎日新聞）
- ・東京芸術大学長講演（1月24日 佐賀新聞）
- ・佐賀大学学長招待講演会（1月25日 読売新聞）
- ・佐賀大学指導者が作品展（1月31日 佐賀新聞）
- ・東京芸術大学長講演会（2月2日 佐賀新聞）
- ・ミランバくんのかくれんぼ（2月9日～2月28日 STS）
- ・佐賀大学美術・工芸卒業+修了制作展（2月17日 佐賀新聞）
- ・卒業・修了制作展（2月21日 STS ニュース）
- ・卒業制作展（2月23日 NHK ニュース）
- ・卒業・修了制作展（2月25日 佐賀新聞）
- ・美術・工芸 卒業+修了作品展（2月27日 毎日新聞）
- ・集大成の卒業制作（3月1日 朝日新聞）
- ・電脳芸術展（3月7日 佐賀新聞）
- ・電脳芸術展（3月9日 佐賀新聞）

平成26年3月14日まで

〔掲載誌〕

- ・「大学と地域を結ぶ美術館」目指す 佐賀大学美術館10月2日オープン（新美術新聞 12月1日）
- ・「何度でも通いたくなる 日常に溶け込む美術館」（TENJIN MAGAZINE ep. Vol. 183 1月号 25p.）
- ・「話題の佐賀大学美術館へも案内 おひなさまと大奥～鍋島の華麗な世界へ」（リビング福岡 中央版2028号 2月8日）

[見学団体一覧]

※見学団体は事前連絡および申告にて把握できた数

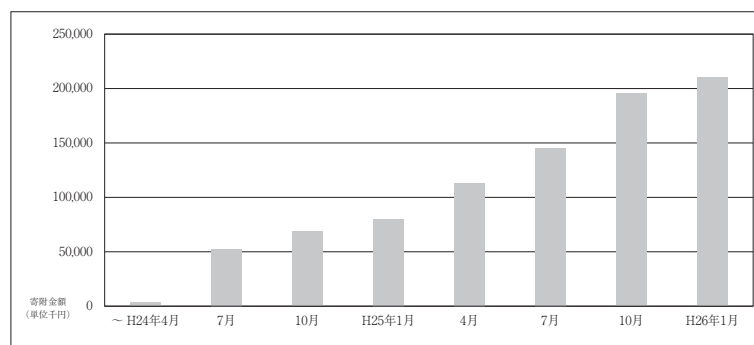
期日	団体名	人数
10月3日	明善高等学校父兄	30
10月3日	筑前高等学校父兄	52
10月4日	経済学部授業	19
10月16日	三養基高等学校 PTA	50
10月17日	同窓会秋季役員会	30
10月21日	九州アートミュージアム研修会	10
10月22日	鍋島内覧会	70
10月24日	育徳館高等学校 PTA	35
10月28日	九州地区国立大学財務会研修	81
10月29日	佐賀女子高等学校	19
10月30日	佐賀女子高等学校	35
11月1日	佐賀女子高等学校	25
11月3日	小城市見学	30
11月8日	理容美容専門学校	34
11月9日	ホームカミングデー	80
11月12日	本庄小学校1年生	29
11月13日	附属小学校	35
11月13日	本庄小学校1年生	30
11月14日	本庄小学校1年生	30
11月14日	精幼稚園	15
11月15日	附属特別支援学校	25
11月15日	佐賀県博物館協会	40
11月26日	本庄小学校2年生	25
11月27日	本庄小学校2年生	28
11月28日	本庄小学校2年生	25
12月9日	県議会議員視察	15
12月16日	県議会議員視察	10
12月18日	本庄小学校3年生	86
12月20日	ケアハウスはがくれの郷	14
12月21日	西日本旅行バスツアー	12
1月14日	元培科技大学(台湾)	22
2月21日	西日本リビング	18
2月27日	今寺寿楽会	20
2月27日	六角小学校	35
2月27日	附属中学校	40
2月27日	八戸工業大学	21
3月2日	西与賀公民館ウォーキングの会	27
計		1202

平成25年10月2日～平成26年3月14日

5. 寄附・その他

[美術館設置募金の経緯]

- 平成23年 6月 美術館設置募金 WG 設置
- 平成24年 4月 美術館設置事業募金開始
- 平成25年 6月 寄附者芳名帳を公開
- 平成25年 6月 美術館規則、美術館運営委員会規定の制定に伴い、美術館設置募金 WG を解散
- 平成25年 9月 美術館に高額寄附者銘板を設置
- 平成25年10月～美術館開館後も美術館募金を継続



募金額の推移

[美術館カフェの椅子]

美術館カフェの1階2階メインテーブルの椅子16脚は、学生によるデザイン。学内でデザインコンペを行い、一席になった作品をもとに、諸富町の平田椅子製作所の協力により制作された。

- 平成25年 5月 美術館カフェの椅子のデザインコンペ参加者を募集
- 平成25年 6月 デザインコンペ参加希望者とカフェソネス、平田椅子製作所のミーティングを実施
- 平成25年 7月 学生によるデザインのプレゼンテーションとデザインの審査を実施、工学系研究科の修士2年中川圭司さんの作品に決定
- 平成25年 9月 平田椅子製作所により制作され、カフェソネスへ納品

[美術館カフェのテーブル]

- 平成24年11月 美術館建設に伴いメインストリートのラクウショウを6本伐採
- 平成25年 7月～9月 伐採したラクウショウを製材
- 平成25年 9月 文化教育学部井川健准教授と学生によりテーブルの制作、納品



6. 入館者一覧表

[入館者一覧]

展覧会	人数	会期	日数	主催	展示会場
開館記念特別展 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(前期) - 『特美』の育成者たち」	12709	10月2日-11月17日	40	佐賀大学美術館	ギャラリー1、2、特別展示室、小展示室
開館記念特別展 企画Ⅱ「だんだんまるまる ようこそだんごむしワールドへ」					スタジオ
開館記念特別展 企画Ⅲ「佐賀大学のルーツをさぐる 佐賀師範・旧制佐高の時代」		10月2日 -2014年2月9日	77		歴史展示スペース
「美術・工芸課程 第55回 総合展」	2816	11月22日-12月5日	12	文化教育学部 美術・工芸教室	全館(特別展示室を除く)
(休館日特別観覧)	15	12月6日	1		
「第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト」	683	12月7日-8日	1	佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所	全館(特別展示室を除く)
開館記念特別展 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(後期) - 今を創る指導者たちⅠ」	2706	12月13日~1月13日	18	佐賀大学美術館	ギャラリー1、2、スタジオ
「第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト」追加展示					小展示室
(休館日特別観覧)	75	1月14日 1月18日-19日	3		
開館記念特別展 企画Ⅰ「美術・工芸教室60年の軌跡(後期) - 今を創る指導者たちⅡ」	2661	1月21日-2月9日	18	佐賀大学美術館	全館(特別展示室を除く)
「美術・工芸教室 第58回卒業制作展 第20回修了制作展」	2375	2月21日-3月2日	9	文化教育学部 美術・工芸教室	全館(特別展示室を除く)
「デジタル表現技術者養成プログラム 电脑芸術展 第4期生 修了作品展」	1611	3月7日-3月9日	3	佐賀大学eラーニングスタジオ	ギャラリー1、2
「都市工学専攻・理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展」		3月7日-3月14日	7	工学系研究科都市工学専攻・理工学部都市工学科	スタジオ
「第15回 書道専攻卒業制作展」		3月9日-3月14日	5	文化教育学部 学校教育課程 教科教育選修 国語(書写)分野	小展示室ほか
計	25651		191		

平成25年10月2日～平成26年3月14日

1953

2013
今を創る指導者たち

part 1

会期—2013/12/13(金)→2014/1/13(日)

日本画 石崎 誠和

西洋画 小木曾 誠

彫刻 徳安 和博

美術理論・美術史 吉住 磨子

美術教育 栗山 裕至

part 2

会期—2014/1/21(火)→2/9(日)

デザイン 荒木 博申

窯芸 田中 右紀

漆・木工芸 井川 健

染色工芸 田中 嘉生

佐賀大学美術館から発信する伝統と革新

開館記念特別展「今をつくる指導者たち」に寄せて

吉住 磨子

佐賀大学美術館 副館長

佐賀大学美術館開館記念特別展「美術・工芸教室60年の軌跡」の後半は、美術・工芸教室の現役教員による作品展「今をつくる指導者たち展」(前期・後期の二期に分けて展示)である。本展の出品作家(教員)それぞれの略歴(学歴・受賞歴等)については、前期展『「特美」の育成者たち』図録(佐賀大学美術館発行 2013年)の中で前村晃佐賀大学名誉教授(現西九州大学教授)が詳しく述べていらっしやるので、ここでは省き、本稿では今回の展覧会出品作を通した各作家の紹介と、作品の特徴を探ってみたい。とはいえ、筆者が出展作家たちの作品をただしく批評できうる知識や感性を備えているかという、甚だ自信がない。誤解、過剰解釈をおかしてしまう危険性があることをお断りの上で、以下に思いつくことを記してみたい。

「今をつくる指導者たち」(以下「現役教員展」)の前期に登場するのは、日本画、西洋画、そして彫刻の作品である。日本画の石崎誠和氏(1976年生まれ)は、今回の展示に「maybeの次元」というタイトルをつけた。19世紀までの西洋の絵画が三次元性を追求し、二次元の平面(支持体)の上に実際の自然(三次元世界)を再現することが絵画の目的とされたのに対して、日本の絵画が志向してきたものは、主に平面性や装飾性であった。そして、日本絵画の画家たちは自然を写実的に描くことよりも、雰囲気や空気感、そして時間といった、形では表せないものを表出することに意を尽くしてきた。

石崎氏の出品作のうち、まず最初に、美術館の南壁に架けられた『wear』の連作7点を見てみよう(Cat. 石崎02)。もぬけの殻のような現代の女性用の衣服たちは、どこかとぼけたような表情を見せ、何ものにも規定されることのない空間(次元)に宙ぶらりんにされて私たちの眼前に存在する。そこには、現代的なものと、日本画の伝統的なものが共存している。

一見、「可愛い」感じのする石崎氏の描く女性用の衣服は、本展に出品された3点の女性像(『服を脱ぐ』(Cat. 石崎03)、『ミントグリーンのパックをする人』、『化粧水を塗る人』)との関係性を考えると、ジェンダー的な意味を纏い始める。石崎氏は、これら3点の女性像において、「身じたく」、「化粧」という伝統的な女性図像を基底におきながら、女性の大胆さ、強かさといった、かつて日本画の女性像には入れ込まれることなかった、つまり従来は「女性性」と考えられなかった女性の属性を苛烈なまでに描きだす。三作品に描かれた女性

はいずれも力強く、遅しく、そしてどこか怖さのようなものさを感じる。爛れたような筆触や、形体を溶解させるような光の表現も、これらの作品の意味を強調するための手段に見えてくる。これら3点の女性像を見てから、再び、空っぽの衣服たちに目を移す。すると、「女性の実態は、(伝統的な女性像が執着してきた)肉体にも顔にもない」という声が聞こえてくる。

ところで、石崎氏は、額に入れられ、鑑賞者の視線の位置に絵画の中心が来るように壁に架けられることを想定してつくられる、「タブロー形式」の絵画から日本画を解放することによって、日本画のあたらしい可能性を模索してきた。極端に低い位置に架けられた『wear』連作や、逆に非常に高い位置に架けられた『wear stars』(Cat. 石崎01)、そして床に直接置かれた『服を脱ぐ』(Cat. 石崎03)の展示方法の意図はそこにある。いずれも、従来のタブロー画の鑑賞方法の「掟」を破ることで、鑑賞者は作品と自分自身のあらたな関係性を、自らの身体をとおして築くことを強いられるのである。

筆者が足を運んだ近年の展覧会会場、人だかりがして、そこには一体誰の作品が展示されているのかと思ったら、小木曾誠氏(1975年生まれ)の絵画であった、という経験を何度かした。小木曾氏の作品の一体何が、見る者をかくも惹きつけるのだろうか。それは、第一に彼が持っている舌を巻くほどの絵画の技術、それによって生み出される作品の仕上げの美しさ、仕掛け(構図、構成)の妙、そして独特の雰囲気であるに違いない(ついでに言えば、彼はそれらを信じられないような集中力と敏速さでもってやり遂げてしまう)。「本物そっくり」——彼の作品の前の人だかりから聞こえてくる声は共通している。現実そっくりのイリュージョンを作り出すことこそ、古代ギリシャ時代以来、西洋絵画が金科玉条としてきたもので、その点で小木曾氏の作品は西洋画の正統的なリアリズムの系譜に真っ直ぐにつながっている。実際に小木曾氏の研究テーマのひとつは、リアリズム絵画の黄金時代を飾る北方ルネサンス絵画の技法とその現代的な展開である。

若く美しい女性たち、異なる質感をミクロ的な視覚によって精密に描き出された静物、秩序のある外国の家並み、そして、繊細な、あるいは壮大な自然—小木曾氏はそれらをオブセッションに描き続ける。それは、ともすれば、一種の常套句に陥る危険性を孕んでいる行為にも関わらず、彼の作品が人々を常に瞠目させるのは、先に述べた技術的なことに加えて、彼が「現実のもの」をどこか夢幻的なものに転位

させる稀有なセンスをもっているからだと思う。動物の骨や凸面鏡の間でしどけない恰好で眠りこける女性たち (Cat. 小木曾01)、樹齢数百年の大木の根元にぽっかり空いた洞のような穴の前で休む女性、そして、よく見ると道行く人が一人も見当たらないヨーロッパの都市の景観 (Cat. 小木曾02)、それらを見る鑑賞者は、現実の世界から、それぞれエロスの世界、神話の世界、超現実の世界といった、現実とは位相の異なる世界へといざなわれるのである。

筆者は小木曾氏の画業のすべてを知る者ではないが、彼は最近、擬古典的な肖像画—古典の名画のパロディーとも解釈できるか—や、光と影のコントラストを効かせたバロック的な肖像画などを発表し、新たな境地を開きつつあるように感じる。次はわれわれ鑑賞者をどのような夢幻世界へと連れて行ってくれるのであろうか。期待に胸が膨らむ。

人体の中に美が宿るという古代ギリシャ人たちの発想は、人間中心主義を旨とする西洋の思想の中で2千年以上生き続けてきた。それは、ヨーロッパ美術が基本とした「自然の模倣」という考えとともに明治時代に日本に移入される。その結果、「人体」、「裸体」は日本の美術における中心的な題材となる。この考え方に対する彫刻界の反応は、絵画に比べるとやや遅く、またその咀嚼にも一定の時間がかかったものの、明治40年代以降、「人体」表現は日本の彫刻の柱となっていく。明治40年に発足した文展は、いく度かの改組を経て日展 (昭和21年～) となるが、日本近代における西洋的な人体彫刻の発展は、文展 (日展) の歴史抜きには語れない。19世紀後半から20世紀にかけてのモダニズムの時代、具象彫刻は、世界的に見れば、もはや過去の文明の遺物となってしまったかのように見えた。しかしながら、その間、日展はさまざまな20世紀のムーブメントの影響を受けながらも、観照の対象として人体を具象的に捉えるという考え方を維持し続け、日展を舞台に多くの歴史的な人体彫刻が生まれた。

徳安和博氏 (1967年生まれ) が、活動の舞台とするのはそのような歴史と伝統を誇る日展である。そして彼がライフワークとするのも、もちろん人体である。そして徳安氏は、この度の「現役教員展」を日展の特選受賞作品を含む1990年から最近作までの人物で固めた。さまざまなポーズや表情をして台座に載せられた10体の人物たちが一同に介したさまは壮観である。そして、このようにまとめて徳安氏の人体像を拝見してまず感じたことは、氏の作品には実にいろいろな様式や趣味^{テイスト}が^{テイスト}見て取れるということである。19世紀後半から日本人が多

な影響を受け続けてきたロダン風の生命感と迫力あふれる人体 (Cat. 徳安01)、デスビオや戦後のイタリア具象彫刻に通じるような清新でスタイリッシュな人体 (Cat. 徳安03)、そして、諧謔性 (愛娘をモデルにした「Nana」) など。しかしながらどの作品にも共通しているのは、近代以降の日本のアカデミックな人体彫刻が多かれ少なかれもっている一種の「重苦しさ」を脱したところにある、品格と穏健さである。徳安氏の作品が、多くの人々から支持を得ている最大の理由の一つは、氏のいずれの作品にもそのことが通底しているからであろう。

人体という、ある意味で制約のある対象をテーマに制作を続けていくというのは、門外漢からすると、作家にとって厳しい闘いに違いないと思われる。しかしながら、一つのテーマの中で、これほど多彩で安定した表現を見せてくれる徳安作品を見てみると、そして、人体について語るときの徳安氏の生き生きとした表情を思い浮かべると、そのような考えは吹っ飛んでしまう。

「現役教員展」の後期は、工芸分野の3名とデザインの1名の全部で4名の教員の作品によって構成された。後期展の鑑賞者は、館内に足を踏み入れるや否や、前期展とまったく違う美術館の空間の使い方に驚かされたに違いない。前期展が3人の作家の展示スペースをそれぞれ区切って、3つの個展を並べたかのような形式の展示であったのに対して、後期展では、1階のほとんどの壁を取り払い、中庭も含んだ一つの大きな空間を、まるで形や色の異なる作品が実る工芸の巨大な森のように仕立てた (写真61頁)。容赦なく陽光が入ってくるオープンスペースに染色や漆芸の作品を並べるのは、「常識破り」であるに違いないが、佐賀大美術館の空間を生かし、よその美術館では出来ない展示を行なうことで、作品の新たな魅力を引き出したという出品者たちの熱意によって、後期展の実験的な展示は実現したのである。このことに対する賛否はあろうが、空っぽであれば、ただのホワイトキューブにすぎない空間が、作品のディスプレイによってかくも異なるアールスペースに変身するというのをこのたびの「現役教員展」は、前後期の対照的な展示方法によって鋭く示しえたと思う。

後期展の出展作家についての紹介に移ろう。窯芸を担当する田中右紀氏 (1965年生まれ) は、エネルギーな人である。いろいろなことをものすごい勢いで片付けてしまう。煩雑なデスクワークでも、体

を動かす仕事でも、料理でも。そして恐らくは制作も。しかしながら、そのようにして出来上がったものの多くは、迫力と同時に、信じられないような繊細さをもっているから不思議だ。

田中氏は、世界的に見れば希少な土であるが、地元有田では簡単に入手できる真っ白い磁器の土（磁土）を素材にして大きなオブジェを作るべく、長年たゆまぬ研究を重ねてきた。磁土は可塑性の低い素材であるので、一般には大きな作品を作るには適さないと考えられているが、田中氏はその問題を地道な素材研究によって克服し、独自の世界を切り拓くことに成功した（その「闘い」の過程は、『美のからくり－美術工芸の舞台裏』（本稿の文末参考文献参照）に詳しい）。

「現役教員展」にも、そのような彼の研究成果をよく表す作品が並べられた。古代の甕棺にインスピレーションをうけ、それを現代的な鋭い感性でやきなおし、また、素材の中に潜在していた「触覚性」を最大限に引き出すことにも成功した『カプセル4部作』（Cat. 田中右05）、同様にやきものとは思えない柔らかい素材感と、生き物がもつような温もりを表現した『Metamorphoses（変容）』のシリーズ（Cat. 田中右02）、そして、佐賀大学美術館の中庭を「舞台」に、スケール感あふれる見せ方で鑑賞者を驚かせた『菌環（Fairy ring）』（Cat. 田中右01）。いずれも、白一色、または白を基調にしたやきものがこれほど多彩な表情をもっていることを鑑賞者に強く印象づける、出色の作品であった。また、筆者は、今回の田中氏の展示を通して、白が光や影に最も敏感に反応する色であることも再認識した。朝と昼と夕方、田中氏の作品はまったく違った表情を見せる。鋭い陽光が射す南欧（スペイン、ポルトガル）でも、田中氏の作品が高く評価されているのは、ひょっとしてかの地の光の量（と影の量）のせいであろうか。そんな考えも頭に浮かぶ。

工芸全般に言えることであるが、素材感と作品のフォルムや色彩が一体となったとき、初めて作品がきりと立ち現われてくる。田中氏の作品の存在感は、素材感のみによって支えられているわけではないことは言うまでもない。足すことも引くことも出来ない、ミニマルで禁欲的なフォルムと磁土のもつ素材感の幸せな出会いが、田中作品のオリジナリティーの核を成す。

2007年から本学美術・工芸教室の木工講座の専任教員のポストにいる井川健氏（1980年生まれ）は、佐賀大ではじめての漆の専門

家である。九州地方全体でも、私が知る限り、国立大学の教壇に立つ漆の作家は井川氏が唯一である。当地において氏の教育・研究活動が今後どのように展開するかが、大きく期待されるところである。

井川氏は、食器などの実用品を制作することもあるが、彼の真骨頂は何と言ってもスケール感のある中大型のオブジェにある。今回の展覧会でも新作4点を含むオブジェばかり8点が並べられた。加飾によらず、塗り（髹漆）のみによる独創的なフォルムをもった井川氏のオブジェ作品は、漆のあたらしい可能性を満腔に秘め、国内のみならず国外においても評価が高い。

井川氏の作品の魅力はあまたあろうが、ここでは、漆の表面で起こる映り込みのことを書いておきたい。井川作品の洗練されたフォルムを形成する複雑な曲面は、周りの環境（光と影、風景、鑑賞者自身など）を取り込んで千変万化するが、漆の素材感（独特の艶）とフォルムを最大限に利用した井川作品のこの映り込みの効果は、魔術的であるとさえ言える。そして、素材感とフォルムが一体となることで生まれるこの素晴らしい特徴は、鑑賞者が作品と直に触れ合うことによって初めて体験できるもので、写真では決して感じることはできないのは言うまでもない。今回の展覧会でも、井川氏の作品の前で体を動かしながら（鑑賞者の視点の移動によっても映り込みは変化する）、この映り込みに驚嘆の声を上げる老若男女の姿を何度か目撃した。

井川氏の作品の洗練されたフォルムや完璧な仕上げを見ていると（Cat. 井川01、02）、人間の「手わざ」の介入を忘れてしまいそうにさえなる。しかしながら、漆芸作品が20工程以上の地道な手仕事によって成り立っていることを思い起こすと、漆の仕事とは、全く気の遠くなるような時間と高度な技術によって支えられていることを実感する。井川氏のことを知っている人には頷いていただけたと思うが、ため息の出るような美しい氏の漆作品と、漆で両の手を常に真っ黒にしている同氏の姿の好対照が、そのことをよく表している。

毀誉褒貶の激しいアートの世界にあって、田中嘉生氏（1951年生まれ）ほど多方面からの高い評価を長きにわたって維持し続けている作家を筆者はあまり知らない。田中氏の誠実な人柄と穏やかな物腰が、それぞれ縦糸と横糸になって織りなされ、染め上げられたかのような作品を前に、鑑賞者は感嘆の、あるいは安らぎのため息をふっと漏らす。そのような印象に加え、今回の展覧会では、田中氏の作品から全くあたらしい印象を受けた鑑賞者も少なくなかったのではないだろう



うか。

上にも書いたように、「現役教員展」においては、外光の入ってくる美術館1階の巨大な空間の中に、工芸作品が剥き出しで展示された。照度の低い展示室の中に、また古い作品であればガラスケースの中に入れて展示されるのが常である染色作品が、このような「異次元」の空間に引っ張り出されたとき、これまでにはなかった染色作品と鑑賞者の新しい関係性が生まれる。後期の「現役教員展」では、天上高5メートルの佐賀大学美術館展示室の特長をよく生かして、見上げるような壁面の高い位置にも作品がセットされた。染色の田中氏の作品も例外ではなく、たとえば、普通なら衣桁に架けられて鑑賞者の視線の位置に展示される着物が、天井に近い壁面に直接架けられ、鑑賞者は度肝を抜かれた(上の写真)。また、美術館の西側の壁面には、いくつかの台座が設えられ、その上のやはり天井に近い部分からすこしずつ高低差をつけて日展特選受賞作品『夏待つ』を含む屏風4点が置かれた。このような展示によって鑑賞者の視線は、高所から低所、低所から高所へと激しく揺さぶられる。あるいは、鑑賞者は全体を一望したい欲求に駆られて、高い台座の上に置

かれた作品からずっと遠ざかる。鑑賞者は、このような佐賀大学美術館の空間と一体となった展示によって、「オブジェ」としての田中嘉生氏の作品にはじめて対峙するのである。

立体的な展示のことばかり強調してしまったが、今回の展覧会では田中氏の作品を至近距離から鑑賞することのできる展示もあった。線の濃淡や太さの違いによって(Cat. 田中嘉03)、生命感、人間の感情、エロスといった抽象的なものを感じさせる『梳る』のシリーズ。古い壁画のテクスチャーを思いおこさせる独特の風合いをもった面を背景に、影絵のように植物モチーフが浮かび上がる連作(Cat. 田中嘉02)。鑑賞者は、それらの作品との対話を穏やかな自然光の中で、ゆったりと楽しむ。鑑賞者は、このような起伏のある展示の中で、田中氏の作品の魅力を二倍、三倍たのしんだ気持ちになって帰路についたに違いない。

一つの会社や団体のイメージ・理念を統一されたデザインによって表徴させる方法をコーポレート・アイデンティティ(略称CI)と呼ぶが、佐賀大学美術館のプレゼンテーションもまたこの方法を採用してス

スタートした。壁に掛けられた絵画や台座の上に置かれた彫刻や工芸品とは違い、署名が入っているわけでも、キャプションが添えられているわけでもないが、佐賀大学美術館を訪れたら、是非、館内各所に刻まれた表示やリーフレット、パンフレット等の印刷物にも注目していただきたい。

美術館のロゴや印刷物のデザイン、そして美術館各所にあるピクトグラム（絵文字、アイコン）や表示のほとんど全てを担当したのは、荒木博申氏（1956年生まれ）である。荒木氏は、このたび美術館のみならず、正門とその周辺、そして美術館をトータルにデザインすることで、佐賀大学自体のファサード（顔）を作り変えてしまったということも付言しておく。

さて、美術館に話をもどそう。荒木氏の専門とするデザイン分野は、グラフィックデザインであるが、その中でも氏が得意とするのは活字を扱うタイポグラフィである。絵画や彫刻に個人様式があるように、荒木氏のデザインする字にはいずれも氏の確固たるスタイルが看取される。たとえば、荒木氏のデザインした佐賀大学のロゴ「SUAM」をとりあげよう。膨大な量のフォントの中から、氏は佐賀大学美術館のもつアカデミックでユニヴァーサルな印象に相応しい字体（古代ローマのトラヤヌス帝の記念碑に見られる碑文体をもとにしたフォント）を選んだ。かくして「ムーサイ（学芸の女神）たちの宿場所（＝ミュージアム）」と「アカデミア（ヨーロッパの大学のルーツとされるものの一つで、アカデミーの語源でもある）」が合体したイメージが、文字によって見事に表象されえたのである。

荒木氏は民間会社において、そしてフリーランスとして、さまざまなグラフィックデザインの仕事に携わった後、大学の教壇に立った経歴を持つ。「現役教員展」の後期展は、そのような荒木氏の多彩な仕事を小規模ながら魅力的なプレゼンテーションによって概観することのできる最良の機会ともなった。鑑賞者は、1階のエントランスから、2階に向かう階段、さいごは2階の小展示室に至るルートの中にテーマ別に設けられたコーナーを回りながら—それぞれのコーナーにある、スタイリッシュな字幕にも注目—一本の装丁、ポスター、図解（ダイアグラム）、そして地図の世界などを、じっくりと味わっていくのである。まるで一つ一つの「荒木博申の小宇宙」を旅するかのよう。

文化教育学部美術・工芸教室には、理論系分野（美術史と美術教育—本展ではそれぞれパネルによるプレゼンテーションを行なった）も入れれば、9分野の教員たちが所属している。そして、その9

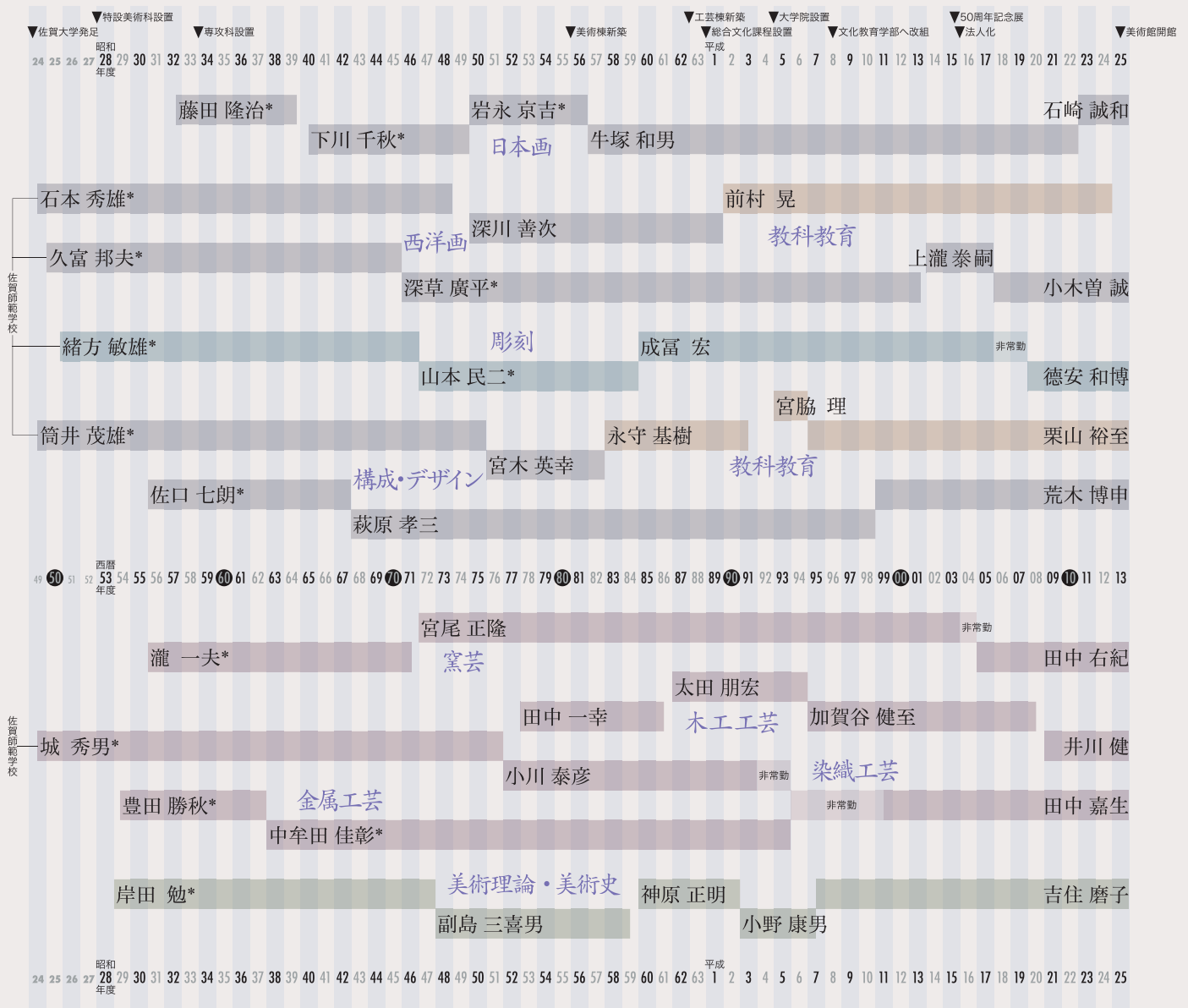
人のコミュニケーション量は非常に多い。このような分野を異とする者同士の対話の中から、私たちは革新的なものを生み出すエネルギーを得るとともに、歴史的、伝統的なものに反応する感性を研ぎ澄ませてきたように思う。この度の「現役教員展」では、そのような個性的な作家たちが、一見すると方向性も造形もバラバラな作品を陳列しているようにみえて、実のところは有機的な強いつながりをもった展示が実現できたように感じるのは—やや手前味噌かもわからないが—、そのような稀有な関係性が教員相互にあるからのように思えてならない。佐賀大学美術館を舞台として、美・工の教員たちが、今後、もっともっと刺激的な展示を見せてくれることを期待し、筆を置くこととする。

参考文献

『美のからくり—美術・工芸の舞台裏』佐賀大学文化教育学部研究叢書IV、ゆるり書房、2011年。
松尾孝司『技ありき夢ありき—福岡の工芸家74年』西日本新聞社、2013年。

歴代教員年表

*故人



石崎 誠和 ISHIZAKI Tomokazu



【日本画】

1976年 石川県輪島市生まれ

2004年 金沢美術工芸大学大学院博士後期課程修了

2009年 佐賀大学文化教育学部美術・工芸講座講師、現在准教授

01 — wear stars

2012年

280.0×200.0

作家蔵

01



02—wear reverce 2013
2013年
130.0×145.0
作家蔵
(02'は展示風景)

02'—誰かと 誰かの壁 全景

02



02'





Small text label on the wall, likely providing information about the artwork.



03—服を脱ぐ
2008年
200.0×200.0
作家蔵

04—ひな段の形をした時間
2011年
200.0×396.0
作家蔵

04



小木曾 誠 OGISO Makoto

●
【西洋画】

1975年 奈良県生まれ

2005年 東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程

油画技法材料研究室単位取得満期退学

2006年 佐賀大学文化教育学部講師、現在准教授

01——静かなものたち

2012年

パネルに綿布、白亜地、油絵具、テンペラ絵具 S100

第88回白日会

作家蔵

01



02—フィレンツェ

2013年

パネルに綿布、白亜地、油絵具、テンペラ絵具 変形100

第89回白日会

作家蔵

02



03—桜の光の中に

2013年

パネルに綿布、白亜地、油絵具、テンペラ絵具 S100

第90回白日会内閣総理大臣賞

作家蔵

03



04—地の音

2013年

パネルに綿布、白亜地、油絵具、テンペラ絵具 S100

作家蔵

04



德安 和博 TOKUYASU Kazuhiro

● 【彫刻】

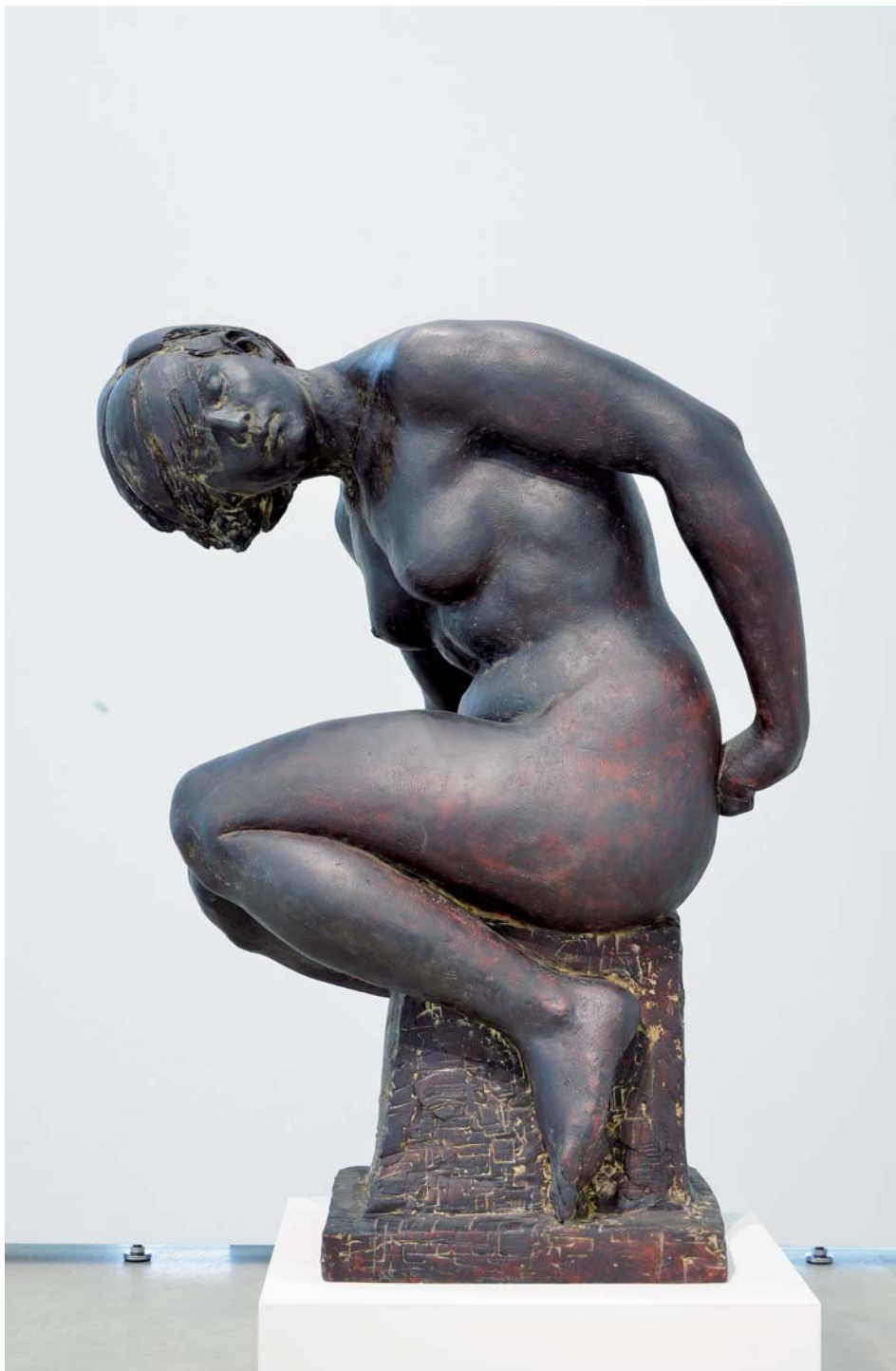
1967年 長崎県生まれ
1990年 佐賀大学教育学部特別教科教員養成課程美術・工芸卒業
1992年 岡山大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了
1992年 中学・高等学校教諭（長崎県）
2008年 佐賀大学文化教育学部 講師、現在准教授

彫刻

01—始動

2012年
FRP 140.0×65.0×90.0
第44回日展・無鑑査
作家蔵

01



02—束
2011年
FRP 187.0×54.0×46.0
第43回日展特選
作家蔵



03— 飛び立つ日を夢見る女
2002年
FRP 215.0×70.0×50.0
第34回日展
作家蔵



04



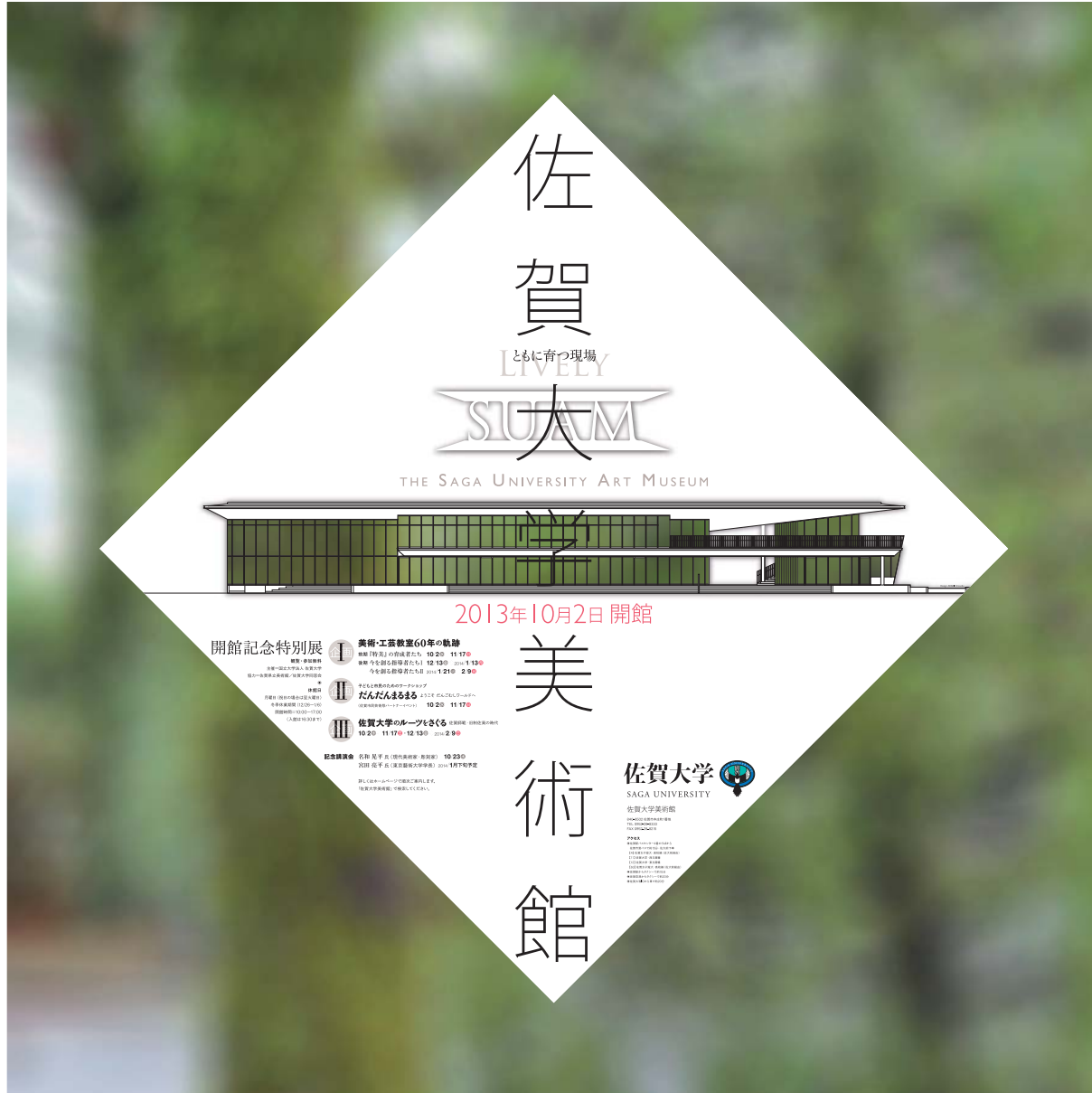
荒木 博申 ARAKI Hironobu

【視覚伝達デザイン】

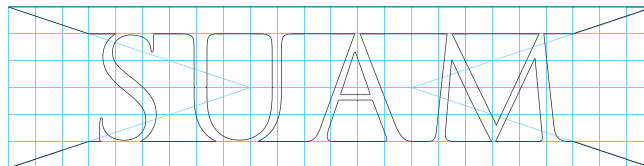
- 1956年 福岡市生まれ
- 1981年 筑波大学芸術専門学群卒業
- 1992年 企業・フリーランスを経て筑波大学大学院芸術研究科修了
- 1993年 兵庫教育大学学校教育学部助教授
- 1999年 佐賀大学文化教育学部助教授、現在教授

- 01——佐賀大学美術館開館記念展ポスター
2013年
透明ポリプロピレン・UV印刷 84.0×84.0
- 02——佐賀大学美術館イニシャルシンボル（割出図）
2013年

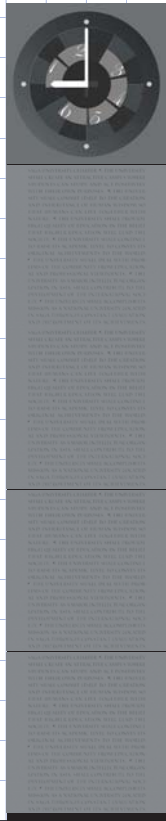
01



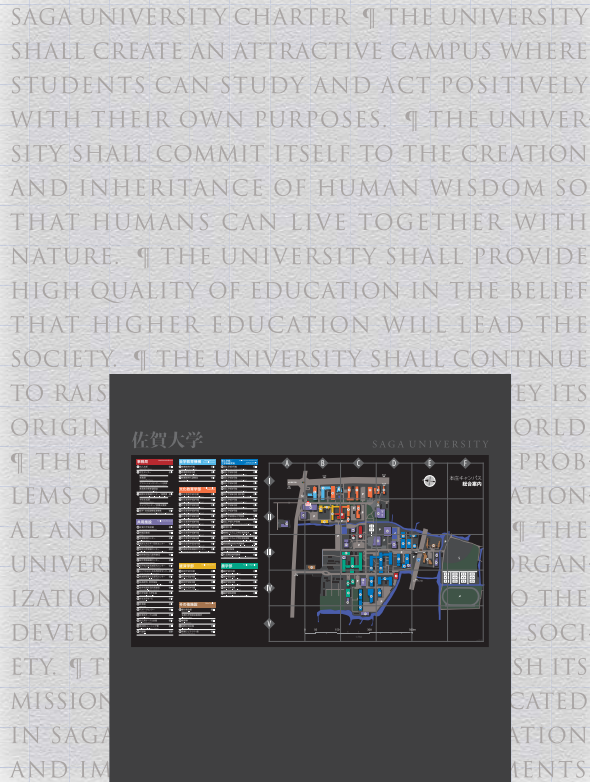
02



03



時計塔 (右に碑文を拡大・×500%)



総合案内板



時計塔

正門正面に設置。表裏2面。
1,000mm角のパネル内に大学憲章の英文を鋳造。
古代ローマ時代トラスカス帝の記念碑に見られる碑文体をモデルとしたフォントで組版。
時計の文字盤内には大学の校時帯を付加。
本体：1,000W×5,100H×250D
アルミキャストパネル/アルマイト処理
鋳造：株式会社ミック
ソーラー電波時計：シチズンTIC株式会社

総合案内板

本庄キャンパス全エリアの施設総合案内 (LED照明付)
本体：2,500W×2,700H×500D
ステンレス製/ウレタン焼付塗装仕上げ
インクジェットプリント/シート切文字

美術館銘板

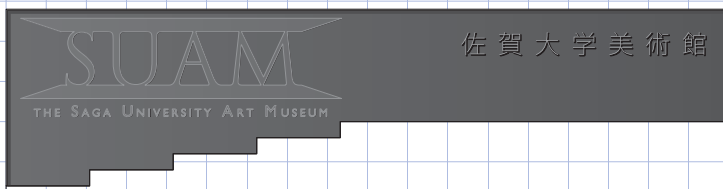
美術館外構の階段部に設置。
本体：4,500W×1,200~600H×50D
スチール無垢板/溶融亜鉛メッキ後防眩処理仕上げ+ステンレス切文字

大学銘板【正門】

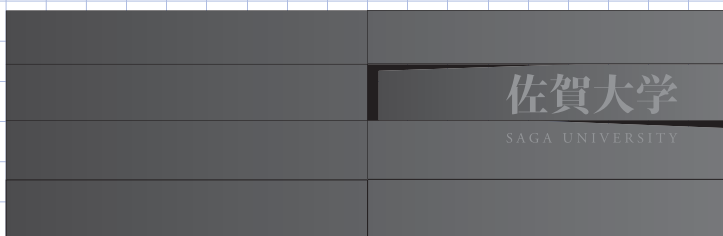
メインストリート正面。
本体：4,500W×1,400H×700D
黒御影石/本磨き仕上げ+文字彫り込み

バス停・駐車場・駐輪場サイン

正門エリア各所。
バス停の裏面には時刻表等の表示部あり。
ステンレス/ウレタン焼付塗装仕上げ+シート切文字



美術館銘板

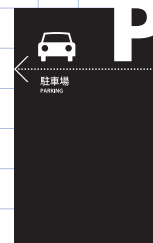


大学銘板【正門】

250 mm grid



バス停



駐車場



駐輪場

05—Alice's Globe (アリスの地球儀)

1994年

オフセット印刷、ケヤキ、ガラス、他 77.5×39.0×62.0

第3回オリジナル地図コンクール銀賞

作家蔵

05



田中 右紀 TANAKA Yuhki



【窯芸】

1965年 佐賀県嬉野町生まれ

1989年 東京藝術大学大学院美術研究課程彫刻科修了

2005年 佐賀大学文化教育学部講師、現在教授

窯芸

01 — 菌環 (Fairy ring)

2012年

磁土 直径350.0×200.0h

作家蔵

01



02 (壁側2点) —Metamorphose "X-X"
2005年
磁土 75.0×53.0×50.0h・60.0×18.0×58.0h
作家蔵

02 (右側) —Orbit
2003年
磁土 85.0×88.0×64.0h
作家蔵

02



02'



03—十二支
2001～2011年
磁土
作家蔵

04—馬俑
2014年
磁土 240.0×120.0×90.0h
作家蔵

05—カプセル (手前から)
食べ物の思い出 50.0×50.0×31.0h
仕事の思い出 72.0×72.0×95.0h
家族の思い出 45.0×45.0×90.0h
社会の思い出 65.0×65.0×86.0h
磁土 (4点共)
2013年
作家蔵

03



04





井川 健 IGAWA Takeshi

●
【漆・木工芸】

1980年 兵庫県生まれ

2008年 京都市立芸術大学大学院美術研究科博士（後期）課程修了

2009年 佐賀大学文化教育学部講師、現在准教授

01——波影（01'は部分）

2014年

漆・硬質発泡ウレタン・木等 331.0×77.7×48.0

作家蔵

01



01'



02上——空夜

2014年

漆・硬質発泡ウレタン・木等 55.0×31.7×156.0

作家蔵

02下——時の航行V

2014年

漆・硬質発泡ウレタン等 202.0×50.5×24.0

作家蔵



03—波の華 (03' は部分)

2013年

漆・硬質発泡ウレタン・木等 170.0×49.0×32.0

作家蔵

Photographs: Suzuki Yusuke

03



03'



04—Line and Surface (04' は部分)

2010年

漆・硬質発泡ウレタン等 195.0×50.0×45.0

作家蔵

Photographs: Suzuki Yusuke

04



04'



染色工芸

田中 嘉生 TANAKA Yoshio

●
【染色工芸】

1951年 北九州市八幡東区生まれ

1974年 佐賀大学教育学部特設美術科卒業

福岡女子短期大学助手を経て講師、助教授

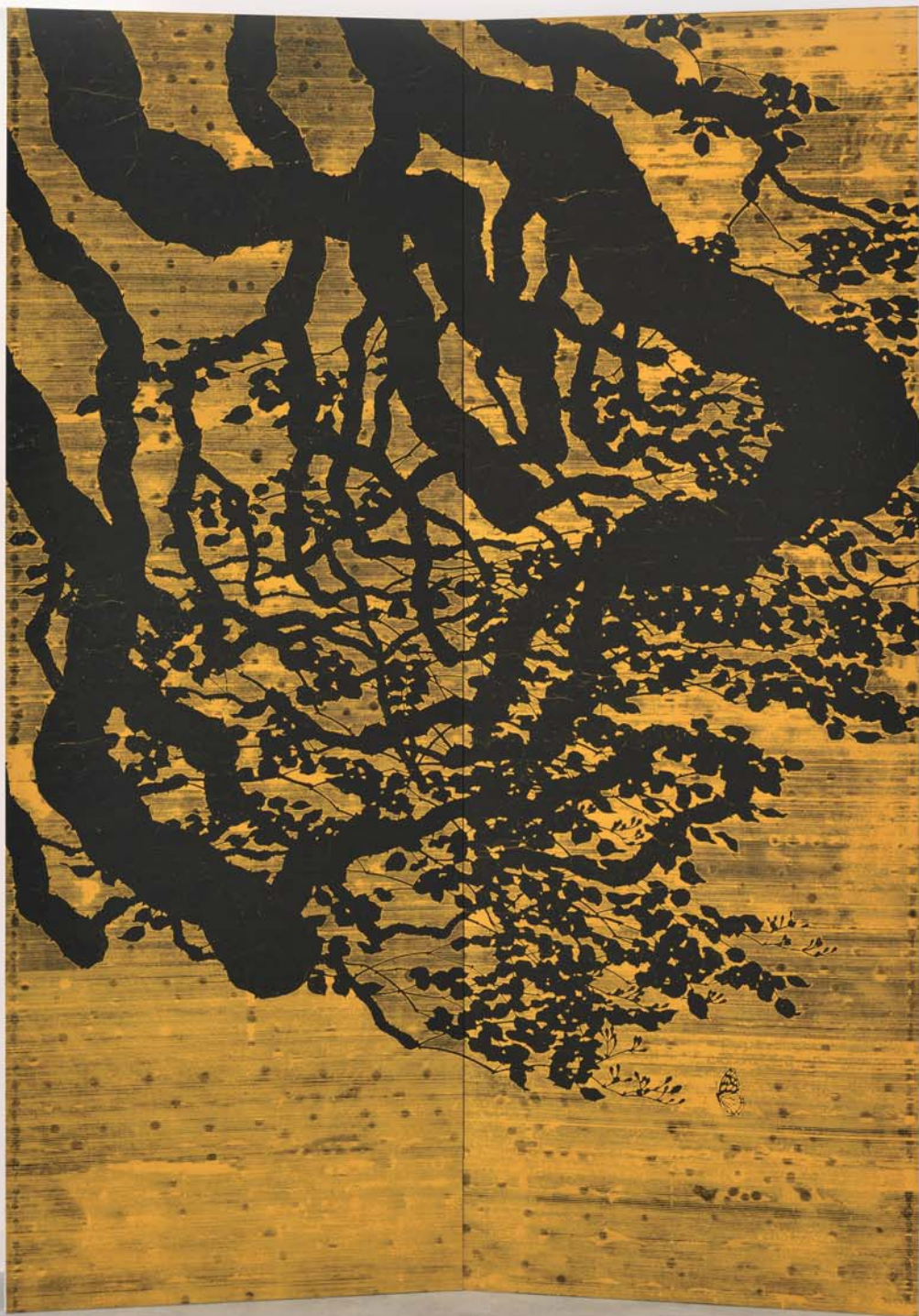
1999年 佐賀大学文化教育学部助教授、現在教授

01 — 展示全景

01



02—夏待つ
2010年
屏風 木綿・蠟染め抜染 180.0×125.0
第42回日展特選
作家蔵



03左—ある日
2006年
屏風 木綿・型糊防染 180.0×125.0
第28回日本新芸展西部読売新聞社賞
作家蔵

03右—ある日の線〜コソデ〜
2005年
第27回日本新芸展日本新芸会員佳作賞
屏風 木綿・型糊防染 180.0×125.0
作家蔵

03



04—積
1985年
第06回九州新工藝展入賞
着物 網・型糊防染
作家蔵



吉住 磨子 YOSHIZUMI Mako

●
【美術理論・美術史】

1962年 大阪府生まれ

津田塾大学学芸学部卒業。

金沢大学教育学部教育学研究科修了。

アバディーン大学神学・歴史学部博士課程修了。

(財)金沢卯辰山工芸工房学芸員を経て、

1997年から佐賀大学講師、助教授(准教授)を経て、現在教授。

大学卒業後、入学したイタリアの大学(後に退学)で、バロック初期の画家カラヴァッジョ(1573~1610年)についての授業に出て、この画家の魅力に取り憑かれ、それから、よちよちこの画家の研究を続けること約四半世紀。いまだに研究の歩みは、加速されることはないし、満足のいく論文も書けないでいるが、飽きることなくやっている。そして、この画家と彼のパトロンたちが属していた多様な領域—文学、音楽、自然科学、宗教、そして哲学—を貫通する公分母ともいえるべき時代背景が、最近やっと少しずつわかってきた気がしている。そしてそれが、ヨーロッパ初期近代の芸術や思想を動かすダイナミズムとなっていったことも。今後はこれまでの研究を広げていくとともに、九州に関わる美術の研究も形にしたいと考えている。

主要業績

Representing the body in the age of Caravaggio and his followers: Studies in Roman art c.1592-1630, unpublished dissertation submitted to the University of Aberdeen, 2009.

『感覚のラビュリントス—Ⅰ.知識のイコノグラフィア、Ⅱ.味覚のイコノグラフィア、Ⅲ.聴覚のイコノグラフィア』(いずれも共著)上村清雄編、ありな書房、2011~2013。

栗山 裕至 KURIYAMA Hiroshi

●
【教科教育】

1967年 佐賀県生まれ

1990年 筑波大学芸術専門学群美術専攻卒業

1995年 筑波大学大学院博士課程芸術学研究科単位取得満期退学

佐賀大学教育学部講師、助教授(准教授)を経て、現在教授。

主要業績

論文「芸術教育への接近—芸術協同体論からの示唆—」『アートエデュケーション』第3巻第1号、1991年。

この論文は、美術教育研究の世界に入って間もない頃に、幸運にも機会を頂き美術教育専門雑誌に書かせて頂いたものである。自分が手掛ける理論研究における問題の所在や独自性が、初めてまとまった形になったものであった。

芸術表現が個性や自己存在の表明であることはもちろんであるが、ではなぜ我々は、時代や地域や言葉などの背景が全く異なる他者の表現に共感し感動するのか。この問題は、人間が創り出す文化としての造形美術の成り立ち方をそのものを問うと同時に、造形美術を通じた教育の意義や可能性にも関わってくる。このような前提の元に、本論文では山本健吉、遠藤周作、大江健三郎といった文学者による芸術協同体論を援用しながら、他者の表現とつながりに共感する心理的な過程や、他者の表現とつながることの価値などについて言及している。本論での問題意識は、少しずつ形を変えてはいるが、現在も自分の理論研究の中で大きな位置を占めている。

数少ない美術教育研究の専門雑誌であった『アート エデュケーション』誌も現在は発刊されていない。本当に幸運であったし、本論の発表後にいろいろ貴重なご批評を頂けたことも、その後の研究の継続への大きな支えとなった。

新人の頃の文章ゆえ、言葉の選び方や全体構成の組み上げ方などは現在と異なる印象がある。明らかに今一つ消化しきれていない箇所などは、読み返して何か落ち着かなくなる。その一方で、綿密な指導の下に改稿を重ね、とにかく全力を傾けて挑んだ論考であったという記憶は鮮明に残っていて、当時の自分が持っていた(のであろう)熱のようなもの感じられる。





佐賀大学美術館

平成25年度

年報＋紀要



2014年3月31日発行

発行 佐賀大学美術館 ©2014

佐賀市本庄町1番地

企画・編集 佐々木 奈美子＋渡邊 恵(佐賀大学美術館学芸員)

編集デザイン 荒木 博申(佐賀大学文化教育学部美術・工芸講座)

編集協力 上田 香苗＋大塚 麻理子(佐賀大学美術館)

印刷 株式会社 昭和堂

佐賀大学美術館



THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM